

家持の歌日記

——その日記文学性について——

森

斌

はじめに

日記文学という形態は、土佐日記や蜻蛉日記を文学作品の嚆矢としてゐる。だが、如何なる伝統から日記文学が生まれて来たのであるか。

日記文学と呼ばれた作品は、創作というよりも自己の周囲、もしくは己の経験を記したものに限定されて、特にその成立が日記と私家集に深く係わりと論じられていた。それは、土佐日記・蜻蛉日記の含み持つ性格によるためである。しかし、発生——成立——展開という問題を考慮したとき、日記文学の発生は少しく文学作品一般にも目が向けられてよい。例えば、日記という概念は、小野篁集が篁物語とか、篁日記とか呼ばれている如く、拡大されている。その意味でいえば、日記・私家集に限定される作品のみならず、日記の根本たる実記の意味と時間の推移を追って記載された形態との二つを、日記文学の発生を考察する場合は配慮するとよいことになる。

これら二つの条件を満たす作品は、既に万葉集に見出される。そ

こで、万葉集を日記文学の発生研究に採り上げて、本論は日記文学の特徴といわれている性格を万葉集に指摘したい。但し、巻十七・十八・十九・二十の四巻が家持の歌日記と呼称されている点に注目して、それら四巻を考察する対象とした。

一、万葉集と日記文学

巻十七以下の四巻は、家持の歌日記と呼ばれている。この四巻の総歌数は六二七首にも及ぶのであるが、家持の詠歌が三三二首も占めていて、まさしく家持が歌作者の中心になっている。しかも、雑歌・相聞・挽歌といった部立をもたず、家持の周辺にいる人達が詠んだ歌を含め、やはり彼の作品が中心になって構成されている。まれに古歌なども挿入されているが、歌作の年代は天平二年十月から天平宝字三年迄の約三十年にわたっている。集中巻十七に録された天平十九年に詠まれたものは、玉井幸助博士が最も日記という形態を示すと指摘された。^{註1}元三番から四(五)番迄の歌群で、それらは家持と池主との贈答歌が中心をなしている。

次に個人的な歌集の形態をなしているものとしては、巻十五に収められている遣新羅使の歌群が採り上げなければならぬ。この歌群は、旅の進行につれて起きた種々の事件や感情を日記的に題詞、左注、そして歌で表わしている。この遣新羅使等に詠まれた一四五首中、瀬戸内海を西下して対馬に到り、竹敷浦に泊るまでの往路で詠まれた歌と詠唱された古歌が大多数で、最後に添えられた五百三三七番(三三三番)が播磨の家島で詠まれた帰路のものである。この歌群中に九六首も作者未詳の歌が含まれているが、とにかく家持の歌日記と異なる舟旅に素材を得ていて、遣新羅使の歌群は紀行文学たる性格が濃厚なものである。

久松潜一博士は、家持の歌日記と遣新羅使の歌群を日記文学の起源として指摘された。^{註2}万葉集は、他の文学形態である物語などの起源発生的な性格も含みものであるが、日本文学の最古たる雑纂歌集であるところに久松博士の指摘も可能にさせるのであろう。即ち、自己の感動を述べる方途が歌に限定されていた時代、歌の雑纂歌集たる万葉集の世界は、日本文学の各分野を派生させる源泉になり得るということである。

ところで、平安時代の歌集では日記的な形態を探るものが多く存在している。特に自撰歌集などは、私家集などと呼ばれ、年次に従って歌が集められて、家持の歌日記と遣新羅使の歌群に近似している。その私家集たる伊勢集で、冒頭部約三十首余りを伴信友が伊勢日記と呼称したのは、伊勢が一編の日記をものしたと考えたからである。ちなみに、秋山虔氏は、日記文学が発生する要因をそこに見出そうとされている。^{註3}

仮名で書かれたものを中心に、私家集を基盤とした日記文学の発

生を考えるにしても、日記文学は日記の本質たる実記ということは無視できない。土佐日記、蜻蛉日記を例にしても、それらはわが身の経験した事実に基づく言語世界である。一方、漢文で記された唐大和上東征伝、入唐求法巡礼行記、行歴抄といった作品も存在していた。それら仮名と漢文の日記文学が如何なる文学の伝統から生まれてきたのか。日記が上代に存在していたのであるから、その伝統を考えるためには、古事記、日本書紀などにも当然考慮すべきであるが、和歌史の立場からいえば、万葉集にまで遡ってみなければならぬ。もしも土佐日記や蜻蛉日記という日記文学の特徴が万葉集に見出されるならば、それは日記文学の発生を解明する手掛りの一つである。即ち、日記文学の伝統は、ひとり平安時代の文学形態のみならず、万葉の時代に既に芽生えていたことになる。

二、形態について

巻十七から巻二十にいたる四巻で、最も日記らしい形態を示すのは巻十七の天平十九年に作歌された歌群である。これら元空番から四五番までの四四首は、越中という北国で初めて経験する嚴冬の二月二十日から九月二十六日までに詠まれている。

家持が越中守として赴任してまもなく、弟書持の喪が任地にもたらされた。その事件があった翌春の天平十九年二月、家持は病魔におそわれ、己自身も死を覚悟している。同月二十日に詠まれた元三番の題詞に、「忽沈^ニ柱疾^ニ殆臨^ニ泉路^ニ、仍作^ニ歌詞^ニ以申^ニ悲緒^ニ」とあって、突如として訪れる死への恐怖、都を遠く離れた鄙に在るための孤独感、それらが天平十九年二月二十日の詠作三首(元三、元四、元五)

の主題になっている。

かかる越中という任地に於いて、家持が得た最良の理解者は同族の大伴池主であった。病患によってもたらされた寂寥を池主に訴えずにいられない家持は、天平十九年二月二十九日から同年五月二日まで書簡を付した和歌と漢詩を彼に贈っている。最も日記的な形態を採る天平十九年の歌日記は、その多くが家持の病中、病後に兩人で交わされた歌から成っている。

そこで、詠まれた歌の日付に従って整理した天平十九年の歌日記は、左記の図の如く示し得る。

- 二月二十日 家持 病に臥した悲緒の歌(三六六)～(三六九)
A 二月二十九日 家持 病を悲しんで池主に贈った歌(三六六、三六六)
a 三月二日 池主 Aの贈歌に対する返礼歌(三六七、三六七)
B 三月三日 家持 「山柿」について触れ、池主の親情に謝した歌(三六八～三七一)
C 三月四日 池主 上巳の佳節をたたえた四韻詩
b 三月五日 池主 Bに返礼した歌(三七三～三七七)
c 三月五日 家持 池主の四韻詩に応えた七言詩と歌(三七七、三七七)
三月二十日 家持 京師に居る妻を思う歌(三七八～三八三)
三月二十九日 家持 立夏になっても霍公鳥が鳴かないのを恨む歌(三八三～三八四)
三月三十日 家持 二上山の賦(三八五～三八七)
四月一六日 家持 夜、霍公鳥の啼くを聞く歌(三八八)
四月二十日 家持 上京するために、少しばかり別れの心情

を述べた歌(三九六、三九六)

- 四月二四日 家持 布勢の湖で遊覧した歌(三九六、三九六)
四月二六日 池主 家持の布勢の湖で遊覧した歌に唱和した歌(三九七、三九七)
四月二六日 家持、繩麿、水通(但、古歌を伝承したのは池主) 池主宅で行なわれた送別の宴席歌(三九五～三九八)
四月二六日 家持 国司宅での酒宴歌(三九九)
四月二七日 家持 立山の賦(四〇〇～四〇一)
四月二八日 池主 立山の賦に唱和した賦(四〇三～四〇五)
四月三十日 家持 入京の日が近づいて、思いを述べた歌(四〇六、四〇六)
五月一日 池主 家持の入京の歌に和した歌(四〇七～四〇九)
九月二六日 家持 放逸した鷹を夢で見て詠んだ歌(四二二～四二五)

右に記した標図で、日付の次の固有名詞は歌作者を示しているが、それに依って知られる如く、作歌の主流をなしているのは家持である。しかも、家持の周囲に居る人の作と伝承された古歌のみを録している。この家持と彼の周辺の人に限定して録する立場は、蜻蛉日記・安和二年の条に、「身の上をのみする日記にはいるまじき」と注して、源高明の左遷にわざわざ触れた作者の筆録態度と一致している。また、和歌の配列は、日付順に並べられていて、しかも題詞・左注にその日の事件や出来事が記されている。このために家持の一日に於ける生活が歌と題詞・左注でまとめられ、一まとまりとなっている。その題詞・左注に記された日付は、時間の観念と事件の確し

かさを証明するもので、まさしく日記の本質である実記であることの証左になっている。この意味するところ、天平十九年に限定されず家持の歌日記は、漢文日記と同質のものである。

三、書簡と歌論

家持と池主の贈答歌には、いわゆる書簡題詞と呼ばれるものを含んでいる。前に凶標で示した中では、頭にアルファベットで注したものである。A B c が家持、a b C が池主のそれぞれ書簡を含んでいるが、A — a B — b C — c とが対応した関係にある。その家持の書簡は、A が我が病苦を訴えたり、池主に「係恋弥深」などという親情を表わしている。また、B は有名な「山柿の門」の句を含むものであって、彼が抱く作歌する理想像を語り、c は池主から贈られた四韻七言詩に対して、「一看玉藻、稍写鬢結、二吟秀句、已闕愁緒」^一と礼を述べ、詩才がないので和歌も添えて返礼したことを述べたものである。

一方、池主は a の書簡で A に対する返礼と陽春の候をたたえて作詩や作歌を樂しむべきだと述べている。C は、a で作詩について触れたので七言晚春遊覽詩を作り、詩序の意味をもたせて彼の詩論を開陳したものである。b は、C の補足と家持の B に対する返答を記したもので、家持の文才が潘安仁・陸士衡の如くまで到っていて、山柿も物の数ではないという内容である。

ところで、歌論・詩論までも直接触れた消息文を挿入した王朝の日記文学は、見出し難いようである。しかし、贈答歌を含めた消息文は、日記文学の主要な素材になっている。その消息文が豊富に挿

入された作品は、蜻蛉日記である。蜻蛉日記は、歌と仮名文とが組合せになったもの、まったく散文のもの、さらに文章の長短になると種々なものがあって、形式と種類とがさまざまである。ちなみに蜻蛉日記・安和元年の条は、家持と池主の書簡を添えた贈答歌群に類似した内容を示す箇所が見出される。

しばしば夢のさとしありければ、「ちがふるわざもがな」とて七月、月のいとあかきに、かくのたまへり。

見し夢をちがへわびぬる秋の夜ぞ寝がたきものと思ひ知りぬる

御返り、

さもこそはちがふる夢はかたからめあはほど経る身さへ憂

きかな

たちかへり、

あふと見し夢になかなかくらされてなごり恋しく覚めぬなり

けり

とのたまへれば、また、

こと絶ゆるうつつやなにぞなかなか夢は通ひ路ありといふ

ものを

また、「こと絶ゆるはなにこそぞ、あなまがまがし」とて、

かとは見てゆかぬ心をながむればいとどゆゆしくいひやはつ

べき

とある御返り、

渡らねばをちかた人になれる身を心ばかりは淵瀬やはわく

となむ、夜一夜いひける。

引用した条は、登子が宮中を退出するとき、不吉な夢のお告げて道綱母の邸ではない別の所へ退いてしまわれた後のことである。やはり悪い夢をしばしば見て、「夢ちがへ」の歌を作者に贈つて来たのが「みし夢を」という和歌で、この歌に応えた道綱母の歌は「さもこそは」である。その他四首は、「みし夢を」「さもこそは」の贈答二首を契機に発展していった兩人のやりとりである。

この安和元年の記事で注意されるのは、登子が道綱母にとって和歌を贈る重要な存在であること、一对の贈答歌をきっかけとしてさらに発展していること、しかもその六首が一つのまとまりを示す筋になっていることの三点である。この三点のことがらは、書簡題詞が添えられて家持と池主に交わされた天平十九年の贈答歌にも指摘できる。

家持が病床にあって己の心情を池主に訴えた歌^{三六六}、^{三六七}を契機として、兩人がやりとりした歌は、歌論・詩論にまでも発展させながら、やはり病苦の訴えとそれに対する労わりの情が貫ぬかれてゐる。即ち、A(二月二九日)に対する返礼がa(三月二日)、これらAとaが契機となつて、山柿に触れたB(同月三日)が池主に贈られ、C(同月四日)で池主がAに作詩で応え、b(同月五日)でBに応え、さらに家持がc(同月五日)で池主のCに詩文と歌で対応させてゐても、それら貫ぬくのは、兩人の友情なのである。しかも、家持には池主が越中に於ける唯一の歌友であった。この歌論・詩論にも言及したやりとりであるが、蜻蛉日記の引用した箇所に類似した内容といえる。

勿論、類似点もあるが異なる内容もある。それは、蜻蛉が一夜に交わされた消息であり、漢詩文が添えられていなく、歌論・詩論に

触れず、描写の主眼が兼家を間接的に表現するところにあるなどである。

しかし、蜻蛉日記が生まれる基盤となつたのは、作者が贈答した歌と独り詠んだ歌であり、特に、兼家との贈答歌が主なものである。その意味するところ、蜻蛉日記は、天平十九年の歌日記に見られた特徴と同質のものが作品を成立させる基盤になっていたのである。

ところで、萩谷朴氏は、土佐日記の主題が歌論書であると述べられた^{注1}。歌論ということからいえば、家持と池主の贈答歌には、山柿と潘安仁・陸子衡などに触れていて、土佐日記の内容に近似している。加えて、土佐日記が漢文日記の形態たる日次記の形式を採つている点は、家持の歌日記と類似している。但し、それらは、日記文学と呼ぶべき性格でなかったり、漢文日記たる紀行書などに影響されて誕生した根拠とすべきである。

以上、日記文学と消息文という関係は、日記文学の本質までも規定するものでないが、蜻蛉日記を成立させる基盤になっていることを指摘して、家持・池主の贈答歌群と比較してみた。

四、持続的に描かれた内面

家持の歌日記で自撰の巻は、恐らく巻十九のみであろうと思われ^注。自撰たる性格をもつ巻十九は、一つのまとまりも見せている。例えば俗に家持の三絶と呼ばれる歌(四九〇)〜(四九三)で、沢瀉久孝博士は「この巻のはじめにも家持の作にその特徴が見えそめてゐる」と述べられ、巻頭と巻末歌が呼応した内容を持つことに触れている。

そこで、天平勝宝二年三月から同五年二月までの三年間に及ぶ家持

の心情を考察して見る。

さて、家持の題詞・左注には、彼の心緒を尊重させて表現したものが多し。卷十九の巻頭歌群に記された題詞を採り上げて見ると、左記の如くである。

天平勝宝二年三月一日之暮詠_三臨春苑桃李花_一作_二(四三九)

見_二瀟翔鳴_一作_二(四四二)

二日、攀_二柳黛_一思_三京師_二(四四三)

攀_二折堅香子草花_一(四四三)

見_二帰鷹_一(四四四)

夜裏聞_二千鳥喧_一(四四四)

聞_二曉鳴鳩_一(四四六)

遙聞_二浜_レ江船人之唱_一(四四五)

そもそも題詞が果す役割とは、作歌された年月日、作者名、そして作歌された事情についての説明にある。この題詞が果す役目からすると、引用した題詞は、作家のそのときに歌を詠もうとした生々しい感情が込められて表現されている。その意味で、家持は題詞に己の心情を尊重させているのである。この特徴は左注についても同様なことになるが、これら題詞・左注の心緒を尊重させた事実からは、家持が總体的に悲しみの情を歌に詠んでいることに気がつく。そこで中西進博士は、家持が忠実に自己の心情に即しながらもその心情の解放を天平勝宝二年以後に得て、大きく歌境を押し進めたことを指摘された^{註7}。では如何なる心情の解放を試みたのであろうか。

越中時代の家持は、二つの大きな事件に遭遇した。守として赴任

した天平十八年に弟書持が亡くなったこと、翌春に彼が重病に倒れ死を覚悟したことである。これら思いがけない出来事が契機になって、家持は越中の風土に興味を増しつつ、作歌に傾注していった。ちなみに家持の越中守時代に於ける作歌数を示すと、次の如くである。

天平	十八年	一首(長歌一首)
同	十九年	三九首(長歌八首)
同	二十年	三〇首
天平勝宝元年	五三首(一〇首)	
同	二年	七七首(長歌一五首)
同	三年	一三首(一首)

右の表で知られるのは、越中時代に詠まれた二二三首中で天平勝宝二年が最高の歌数を示すことである。だが天平勝宝二年には、同族で歌友であった池主がいなく、さらに越中の風物にも興味を示していない。家持は、独詠歌に己の心情の解放を試みている。即ち、天平十九年に「仍作_二歌詞以申_一悲緒_二(三九三・題詞)など述べて池主に贈ったのであったが、今次は独り居て静かに己の感情を歌に托している。

この独詠歌に托した心情の解放とは、京師を思慕することから生まれた悲緒である。それは、卷十九の巻頭歌群が雄弁に物語っている。それらの歌で、直接に京を思慕する感情を詠んだのは、次の四首である。

春の日に萌れる柳を取り持ちて見れば都の大路し思ほゆ(四四)

三

燕来る時になりぬと雁がねは国僂ひつつ雲隠り鳴く(四四四)

春まけてかく帰るとも秋風にもみたむ山を越え来ざらめや(四四)

四五

漢人も後浮かべて遊ぶといふ今日そ我が背子花縵せな(四五三)

家持は京を思出して、その鬱結した心情を撥おうとした。天平勝宝二年に詠まれた七七首の多くは、己を慰める方途として作られたものである。そして、歌友池主が居ないことなどが、京師を独り静に思い出させて作歌させることになった。

かくも都を思慕していたが、天平勝宝三年に五年間の任を終え、家持は帰京した。上京した後、彼の歌日記には、宴席歌や予作歌が記されているに過ぎない。越中で二二三首もの詠歌をものした家持であったが、帰京後の天平勝宝三年から同四年までは六首を歌日記に録するのみである。この空白に近い寡作は、家持が必然的に孤独にならざるを得なかったことを物語っている。即ち、翌五年になると歌作に傾注する家持が見出されるのは、「悽惻之意非_レ歌難_レ撥_レ耳」(四四二・左注)という情態に至っていたからである。

この四四番の左注で述べたことは、越中守時代に「仍作_二歌詞_一以申_二悲緒_一」(三六三・題詞)乃至「悲情難_レ撥_二述_一懷」(四〇六・題詞)と記した心情の告白と同じである。悲緒、悽惻そして悲情を暗らす方途は、歌を作ることだった。しかも、悽惻を撥う唯一の方法が歌うことだと言つて詠まれた作品は、卷十九の巻末に載せられ、天平勝宝五年二月二五日に作られている。

うらうらに照れる春日に雲雀あがり情悲しも独りしおもへば

(四四二)

右の歌は家持の代表作の一首であり、多言を必要としない程さまざまに論じられている。しかし、歌詞にある「独り」という孤独な感情を示す言葉は、日記文学の本質と呼ばれる自照性を考察するうえで重要な手懸りになる。

そもそも「独り」などということは、相聞歌で対象を君とか妹とかにして、己を意識した使用がほとんどである。やはり家持に於いても相聞歌に用いられるのを通例としているが、ここで使用された「独り」は、対象とするべき人物がいない。しかも、この四四番の左注に記された「悽惻」とか「縮緒」とかは、何かかかる心情をもたらず原因があつてしかるべきである。だが、このとき具体的に失意を味わう事件は、家持の人生に見出し難い。むしろ、これ迄の人生から、家持は己という存在が社会で「独り」であることを自覚したのではないだろうか。

家持には詠作の歴史があつた。そのときどきに詠まれた歌は、彼を内省させるものである。であれば、社会から隔絶した「独り」に気がつくことは、家持が詠み続けて来た歌に依るものといえる。言辞を変えていえば、歌日記を書き続けることが、自己を内省させ、しかもその到達点に「独り」なる境地を具現させたのである。即ち、天平勝宝二年三月から同五年二月まで、家持は己の心情の解放を系統的に歌で試みた。その内省は、己が社会から隔れた「独り」の存在であることを自覚させた。ここに到れば、この家持が示した「情

悲しも独りしおもへば」という孤独は、貫之や道綱母とも結びつくと思われる。

土佐日記の自照性とは、貫之が任国で亡した女兒に対する悲しみを凝視して描いた内省をいう。また、蜻蛉日記では、己の絶望的な人生を觀照して得た心情が自照性と呼ばれる。これらは、家持が悲しい心情の解放を試みて得た内省、即ち自照性と同一である。加えて、家持の「独りしおもへば」といった自覚は、貫之が土佐日記で「わすれがたく、くちをしきことえつくさず」と、道綱母が蜻蛉日記で「あるかなきかの心地するかげろふの」とそれぞれ述べざるを得なかった孤独の認識と一致するのである。

以上は、平安時代の日記文学が本質とする自照性について、家持の歌日記たる卷十九にも既に芽ばえ、そして具現していることを述べて見たのである。

結 び

万葉集卷十七以下の四卷が、如何なる点に土佐日記や蜻蛉日記などと内容の類似を認められるかを考察して見た。その結果、家持の歌日記と呼ばれた四卷は、漢文日記の形態を示すこと、自作の歌を中心に贈答歌が挿入された構成を採っていたこと、日常生活に見出される題材を詠んだ歌が主なもので「身の上のみする日記」であることなどの諸点が平安朝の日記文学と近似していた。

これらの意味に関する限り、家持の歌日記は、平安時代の作品であれば、あきらかに日記文学と呼んでいい。特に、卷十九は内容のまとまりと日記文学の本質とされる自照性が見られ、平安時代の日

記文学と何ら異ならない。思うに、家持の歌日記卷十九は、自立した日記文学としても理解できる。

さて、これら家持の歌日記が示す日記文学性は、万葉集が含みもつ多様性として理解されてきた。しかし、家持の歌日記は、日記文学の成立に歌日記が必須の条件であることを物語っている。

ちなみに、日記文学が成立する平安中期、既に日記・物語・歌集などの名称を複数もった作品も誕生していた。だが、文学形態がいくら未分化の時代であっても、歌日記が伝統となっていなければ、伊勢物語が在五中将日記などと呼ばれるはずもない。即ち、自作の歌が中心に蓄えられて歌日記となり、その歌日記がさらに主成・展開していったものが複数名称の作品となるということである。

但し、ここで一考したいのは卷十九の存在である。卷十九は日記文学と呼称してよい内容であった。この意味するところ、歌日記には日記文学として自立した内容を示すものもあるということである。この事実とは、歌日記が日記文学になり得るということを示すばかりか、歌日記が日記文学も誕生させたということである。

以上、家持の歌日記は、文学形態として歌日記の存在を語るものであり、集中卷十九が歌日記から日記文学という発生から成立までも示していたのである。

注 1 『日記文学概説』第二章第一節 二七〇頁

2 『日本文学史(上)』日記文学の成立と和歌 一一七頁

3 『王朝女流文学の形成』伊勢日記解 一六六頁

4 『土佐日記は歌論書か』(国語と国文学 第二五卷六号)

- 5 卷十七以下四卷の編者については、中西進博士の「家持の追憶——歌『歌日記』の形成——」(文学 第三四卷六・七号)が詳細を尽して論ぜられている。参照
- 6 『万葉集注釈』卷十九 一二〇頁
- 7 『万葉集の比較文学的研究』家持ノート 四七〇〜四七二頁

昭和五十三年度 日本文学会講演会

期日 昭和五十三年十一月十五日

場所 本学別館四〇一

内容 「いちはやきみやび」

比治山女子短期大学教授 清水文雄氏

バックナンバー ⑥

第六号 昭和五十一年 重友毅教授退職記念号

重友 毅教授のご退職を記念して
 古典の研究について
 —— 事実より真実へ ——
 重友 毅

「方丈記」から「海道記」へ
 西鶴雑考
 —— 世之介の出生 ——
 加藤 愼一
 小野 晋

『月に吠える』の作品構造
 合戦譚伝承の一系譜
 —— 「屋島軍」の場合 ——
 松原 勉
 武久 堅

山口県錦川流域方言状態の方言地理的研究
 学校作文法の構想
 藤原 与一
 永尾 章曹

宇治十帖の文学的意義
 「破戒」小論
 —— 社会性に関する一考察 ——
 常政 順子
 倉田 洋子

研究ノート

日本語の文アクセントについて
 近藤ひとみ

彙 報・昭和五十年度卒業論文題目